

高知県立高知城歴史博物館所蔵『後三年合戦絵巻』をめぐって

目黒将史

*キーワード

後三年合戦絵巻・土佐藩・山内家・小谷守本・伊勢貞丈

一、はじめに

高知県立高知城歴史博物館所蔵『後三年合戦絵巻』は、山内家に伝来の絵巻である（以下、山内本とする）。まず書誌を記しておこう。

〔請求記号〕二一九 〔形態・数量〕絵巻・三卷三軸

〔外題〕後三年合戦絵図（直書） 〔内題〕なし

〔表紙〕後表紙、白地、無紋 〔見返し〕白地、無紋 〔料紙〕楮紙

〔寸法〕上巻・縦四五・〇×全長一六八七・九、表紙二六・六、軸付紙

四二・八糶、中巻・縦四五・二×全長一五三五・八、表紙二六・八、軸付

紙二〇・〇糶、下巻・縦四五・一×全長一六五二・四、表紙二七・〇、軸

付紙一八・四糶 〔用字〕漢字・平仮名

〔絵〕上巻・淡彩画・全五図、中巻・淡彩画・全五図、下巻・淡彩画・

全五図 〔書写年次〕安永四年

〔書写者〕詞 伊勢貞丈か、絵 安藤吉次郎定瀬（司馬江漢？）

〔奥書・識語〕後掲 〔備考〕箱題（中央）「奥州後三年合戦絵巻 三卷」、

箱裏書入「天保八年丁酉三月五日出来」。裏書、上・中・下巻とも、

小谷守本による朱筆の書き入れあり（後掲）。中巻・下巻に痛み、下

巻に糊剥がれ、分断あり。

痛みが激しいが、上・中・下巻、三卷三軸揃っている。絵巻の縦の長さが四十五センチを超える大きな装丁であり、特別な絵巻であることは一目見てわかるものである。

『後三年合戦絵巻』の絵巻について、東京国立博物館に、もと池田家の至宝であった絵巻が所蔵されており（重要文化財、『日本絵巻大成』15所収、以下、東博本）、その模写本が多く残されている。楊曉捷は、「絵巻の構図や表現の意図、そして失われた輪郭や色彩を思い起こさせるといふ、古典の絵の注釈という基礎作業において、貴重な情報源である」

とし、模写本の重要性について説いている。模写本を読み返すことで、^{〔1〕} 原典である絵巻の解釈も深まり、読みの可能性が追求できるとするのである。

山内本は土佐藩士の小谷守本^{おたにまもる}により作成された、いわゆる模写絵巻である。その伝来を伺うと『後三年合戦絵巻』が、いかに武家の知識として重要だったのが垣間見られる。また、山内本からは、この絵巻がいかに実際に手にとって読まれたかが伝わってくる。模写本ということだけでなく、一つのテキストとして向き合う価値のある絵巻である。本稿では、山内本『後三年合戦絵巻』を手がかりに、武家知識としての絵巻利用、合戦絵巻享受の一樣相を垣間見ていきたい。

二、山内本の奥書・識語をめぐって

以下に奥書・識語をまとめた。便宜上、「奥書・識語1〜5」に分けた。
〔奥書・識語1〕を除き、すべて下巻末尾に記されたものである。

〔奥書・識語1〕（本奥書、東博本の奥書）

〔上巻〕詞 文殿寄人 仲直

〔中巻〕詞 左少将 保脩

〔下巻〕詞 従三位行忠卿

画工飛驒守惟久

〔奥書・識語2〕（もと書き入れ、東博本修理由来書）

右後三年軍記書画三巻者播磨宰相（輝政卿）／北方（源普宇子東照神君之／御女号良正院）之所持而被家突世之珍藏也／玄孫右衛門督吉明朝臣恐其久而破壊也今茲元／禄十四年辛巳冬十月就京師而修補焉有故許供／天覽聖感不尠寔可謂希世之勝宝矣修補功成請于／余欲録其事以遺後裔余不獲辞遂書以贈之

元禄十四年辛巳冬十月下旬／特進藤基時誌

〔奥書・識語3〕（本奥書、伊勢貞丈所蔵本の奥書）

右後三年軍記乃書画者新井筑後守源君美乃蔵本を其／嫡孫源邦孝に乞ひ借り又別に善本を得て校合し安藤定瀬を／頼みて模写しぬ按するに東鑑に承元四年十一月廿三日丁未奥州／十二年合戦絵自京都被召下之今日御覽仲業依仰読申之と見／えたり是鎌倉実朝公の代也此巻物は即其時の物也後三年記を見／るに武衡は国司追かへされにけりと聞てといふ前に軍のおこりを戴勢／たり然れば此巻物右は五六巻はかりもありし成へし今はた、此三巻／のみ残り伝れり

安永三年甲午二月廿七日 江府扈從隊士伊勢平蔵貞丈書

〔奥書・識語4〕（山内本奥書）

いにしへ本朝軍器考（新井白石／先生之撰）をよみしに惟久か画るる／後三年合戦絵といふ事を所々引用せられしを見て此巻の／世に在る事を知れり明和四年の春田沼殿の老臣深谷か所蔵を初て／見る事あり大巻

にて微力の不及事と思ひしかとも年月を／巨るに付て心に掛りしか去春江戸に下り 伊勢家に参り／室町家の礼法を学ひしいとまに弓馬の故実物の具の古風を尋ね／問ひしにふるき事をさくらんにはかゝる物にはしかしと此三巻を見せ／給へり再三くり返し見るに画伝えし所感するにあまり／有古画の絵軸世に多しといへともかく伝来正しき物あるべ／きとも覚えずよりの本をかり乞ふて写さんとすれと／画図筆力不叶とやかくと月日をおくりけるに幸に安藤吉次郎／定熙主に進参らせふかく頼みてつゝに模写する事を得たり／貞丈君志のせつなるをめて三の巻の詞箱の銘までさゝやかに／書うつして下されぬ其恩頼ふかき事筆に尽くしか／たし永久に伝へ／てゆるかせにすることなかれ年来の宿／望達しぬるあらましを書付て巻の末に附しぬ

安永四年乙未年七月十三日 土州所士小谷左近助橋守本書

〔奥書・識語5〕（山内本書き入れ）

付而云此巻詞書を／先々師の写下されしはおのれを愛し給ふのあまりなれば巻の／表装あやなすへきことなれと其比は何くれ心にまかせす力なく紙の／袖取つけ置るるか写せし年ことはや四十四年の昔に成ぬればそこ／そこ／ねしにより此春のすさみに外箱作らせみつから此そてこしらへぬ／此きれ恐れみと／御免候て御代君の一反の御羽おりのはてなりて明四展とし御あか付を／世子君え進らせられ召ふるしをおのれに賜はりぬ／御二代の御垢沢蟬の羽ノことき物数奇屋縮とて其比京にて掛初しらしき物也／年ふりやふれそこねしをひとつのそこより取出てかくはなせ

し処也又／去年の冬故ありて外題を／油小路少将隆道朝臣に乞奉り巻の光りをかゝやくす便りとす是偏に／君父師の恩頼をいさゝか奉報一端ならんかも時そ文政二卯年三月九日／をの禿筆をけかし畢 守本〔花押〕

〔奥書・識語1〕〔奥書・識語2〕は、東博本に由来するものである。ただし、東博本〔奥書・識語1〕（上巻）の奥書は、「詞 仲直朝臣」であることには注意すべきである。

〔奥書・識語3〕は、山内本の親本である伊勢貞丈所蔵本（以下、伊勢本の奥書である。これによれば、安永三年（一七七四）、新井白石旧蔵の絵巻をその嫡孫である邦孝に借り受け、安藤定熙が書写したとする。

〔奥書・識語4〕が山内本の奥書となる。「安永四年乙未年七月十三日 土州所士小谷左近助橋守本書」とあり、伊勢本が写された翌年（一七七五年）に土佐藩士の小谷守本によって記されている。小谷守本は伊勢貞丈の弟子として知られる人物であり、〔奥書・識語3〕から続く、山内本の伝来に不審はない。また、当絵巻は土佐藩主の山内家に伝わるものであり、小谷守本（もしくは小谷家）から山内家へ渡っていたとしても不思議はない。この奥書から山内本の来歴がはっきりとし、山内家へ『後三年合戦絵巻』が伝来する物語が垣間見られるのである。

では、詳しく内容をみていこう。明和四年（一七六七）、小谷守本は『後三年合戦絵巻』と運命的な出会いをする。「田沼殿の老臣深谷」は、田沼意次の家臣、深谷市郎右衛門であろう。⁴『後三年合戦絵巻』を披見した小谷は、そのすばらしさに惚れ込むものの、その長大さに書写を断

念する。その後、安永三年（一七七四）、師である伊勢貞丈のもとで『後三年合戦絵巻』と再会を果たす。「奥書・識語3」によれば、伊勢本の書写時期と重なる。ここでも伊勢本の書写を試みるも、絵画を詳細に模写することができない。そこで「安藤吉次郎定熙」に頼み込み、書写を行うのである。

さて、この「安藤吉次郎定熙」であるが、伊勢本の書写者である「安藤定熙」と同一人物であろう。そして、絵師として名高い司馬江漢であろうか。江漢は通称を「安藤吉次郎」とした⁵。伊勢本の書写当時（安永三年）、江漢は二十八歳、すでに司馬江漢と名乗り始めており、平賀源内と親交を深め、漢画家として名声を広めていた時期である⁷。もし書写が江漢だとするならば、江漢が絵巻の模写を手がけていたということになる。これは大変に興味深い。しかし、なぜ「安藤吉次郎定熙」と記されるのか、「定熙」の名前が文献に確認できないことなど謎も多く、司馬江漢と認めるには決定打に乏しい。ただ、当時これだけの絵巻を模写できる人物として、書写が江漢である可能性がまったくないわけではない。美術史など学際的な分析が急務であろう。

小谷守本の『後三年合戦絵巻』に対する情熱は、師の伊勢貞丈にも伝わる。その姿勢が褒め称えられ、「三の巻の詞、箱の銘まで、ささやかに書き写して下されぬ」とする。つまり、山内本の詞書は伊勢貞丈の手によるものと解釈できる（上・中・下巻の書写は同一人物であろうと思われる）。「箱の銘」について、箱書に、「天保八年丁酉三月五日出来」とあり、現存の箱は、天保八年（一八三七）に作成されたものである。

小谷守本が伊勢貞丈のもとで絵巻を作成した折には、別の箱があったと推測される。現存の箱は小谷守本死後のものであり、もしくはこのあたりで山内家へ寄贈されたとも考えられるが憶測の域を出ない。

奥書から、『後三年合戦絵巻』を手にできたこと、師御自ら作成に関わってくれたこと、小谷守本の感動があふれ伝わってくる。奥書の信憑性について、当絵巻が山内家伝来であること、小谷守本が伊勢貞丈の弟子であることから確かなものであると推測できる。正確を期すためにも、伊勢貞丈の筆跡との綿密な比較分析が急がれる。

「奥書・識語5」は、文政二年（一八一九）に小谷守本が奥書の後に書き入れたものである。この年次は、制作した安永四年（一七七五）から四十四年経ったという内容とも符合する。師が詞書を書き写してくれた大切な絵巻であるが、時を経ることに装丁が崩れてきたことが語られている。後に記されるが、この時に表装もし直されているのだろう。しかし、実際に中巻・下巻には痛みがあり、下巻はとくに激しい。「奥書・識語5」の書き入れと、紙と紙とをつなぐ糊が剥がれ、分断されている絵巻の現状を鑑みると、いかにこの絵巻が土佐において読まれたのかが見えてくるのではないだろうか。

装丁が崩れたため箱を新調することが語られる。ただし、先にも指摘したとおり、現存の箱は、天保八年（一八三七）に作成されたものである。絵巻が制作された安永四年（一七七五、箱書が伊勢貞丈）、表装し直された文政二年（一八一九）、現存の天保八年にそれぞれ箱が作られていることになる。それだけ大切になされたということだろうか。ただ、

その後の当主から羽織が贈られたことも含めて、この書き入れは少し解
釈に難があるように思われる。

最後に「油小路少将隆道朝臣」によって外題が記されたことが語られ
る。この時点で表装がし直され、現存の外題が記されたと解するべきだ
ろうか。⁸この二年後、小谷守本は死去している。

三、国会本との関係性をめぐって

ここまで奥書を手がかりに山内本の伝来についてみてきた。実は山内
本の「奥書・識語3」と同様の奥書を持つ絵巻が国立国会図書館に所蔵
されている（以下、国会本）。ただし、国会本には、本奥書である「奥書・
識語1」（中巻）「詞 左少将 保脩」がない。⁹そして、「奥書・識語3」
の直前に朱筆で書き入れがある。¹⁰また直後にも墨筆で書き入れがある。

追記、安永五年丙申六月、土佐家の門人住吉氏の弟子、板谷（朱書
書入Ⅱ後住吉）慶舟広矩か本を借り得て、此本に／校合せり。其本
は住吉が惟久の真跡を伝写して、おほやけに奉りし時、私に一本を
写しとどめ置／けるを、板谷が伝写したる本也。今その板谷が本を
以て、我此本に校合するに、墨かきの地とり又珍しき／鎧威毛など
の色とりなどは同じで、其外の彩色は異なる所あり。いかなればか
く違ひてあるぞと考る／に、惟久が彩本を後に土佐光信が伝写した
る本世にあり、予が新井氏より借り写せし此本も、又外に／五、六
本見しも、皆光信が本を伝写したる本也。光信が比は墨書の地取を

ば大切の事にして彩色など／有。あながちにか、はらざりしにや。
今我此本は、光信が本に惟久が本のいろとりを加へたれば、何れの
／本ともかたはかぬ物になりしなり。これを校合するに改らるべき
をば改めつ、改がたきをば、そのまゝに／さし置きぬ。後日別に惟
久が真本を写べしと思ふのみ。平貞丈記

国会本が伊勢貞丈が所蔵した本であるかどうかはわからない（伊勢本
の書写本である可能性は大いにある）。ただ、山内本と関係が近いこと
は間違いないだろう。この書き入れが正しければ、安永三年（一七七四）
に伊勢本が書写され、その翌年（一七七五）、山内本が書写され、さら
に翌年（一七七六）、伊勢貞丈により、「板谷が本」との校合がなされ、
この書き入れが書き込まれたことになる。ただし、山内本の彩色は何を
もとにしたのかという疑問が生まれる。

装丁について、国会本は『前九年合戦絵巻』とともに七巻七軸の仕立
てになっている。¹¹東博本が三軸仕立てになっており、「奥書・識語3」にも、
「此巻物、右は五、六巻ばかりもありし成べし。今はただ此三巻のみ残り
伝れり」とあるように、伊勢貞丈が絵巻の制作を依頼し、完成した時点
では、三軸の装丁であったことは間違いないだろう。それは山内本にも
引き継がれている。それが『前九年合戦絵巻』とともに七軸に仕立て直
されたのが、国会本なのである。

高知県立高知城歴史博物館には、山内本とともに山内家伝来の『前九
年合戦絵巻』が所蔵されている（請求番号、二二八）。国会本の一軸目
には詞書があり、山内家伝来『前九年合戦絵巻』には詞書が欠落してい

るなど、伝本の様相が明らかに違っている。山内家伝来『前九年合戦絵巻』とは伝来をまったく異にするものである。また、国会本は、『後三年合戦絵巻』の三巻仕立ての冒頭にあたる、二軸目、四軸目、六軸目の右上に「由学館」（長方形朱印）の蔵書印がある。¹²『前九年合戦絵巻』にあたる一軸目にはない。これを鑑みると、国会本は伊勢本を祖本とする写本であり（国会本が伊勢本である可能性がまったくないわけではないが）、由学館を経て、『前九年合戦絵巻』と一緒にになったときに仕立て直されたと考えるのが妥当であろうか。

山内本と国会本の上巻冒頭の絵画を見比べてみると、相違が大きく、絵師が異なっていると思われる。また、国会本には色指示の注記があるが、山内本にはなく色彩されている（必ずしも国会本の注記通りではない）。そして、国会本に描かれる衣服の紋様は、山内本には一部しか描かれない。東博本では完全に絵の具が落ちてしまっている。一例を挙げると、上巻三段目、襖に白鷺が描かれる¹³。国会本は左の襖に二羽描かれるのみだが、山内本は右側にさらに五羽、雁行で飛ぶ様子が描かれる。また、下巻冒頭の板壁に描かれた紋については、国会本が白で型だけ描いているが、山内本は紋様を描いているなど、必ずしも山内本が図様、紋様について描いていないわけではない。また、下巻四段目の義家の座る小紋高麗縁の置畳の紋様はまったく同じ描かれ方をしてい。しかし、義家の顔の描き方が異なっている。

まとめると、山内本と国会本は関係性が近い伝本であり、国会本からは伊勢貞丈のもとで『後三年合戦絵巻』がかなり緻密に研究、分析され

ていたことがわかる。次節で詳しく見ていくが、山内本も小谷守本による研究、注釈が行われている。

四、武家の知識としての絵巻享受

山内本の最も大きな特徴は、裏書に小谷守本による注釈が、朱筆で書き込まれることである。以下、裏書をまとめてみる。改行は追い込み、句読点などを付した。

〈上巻・一段〉

陸奥国々に伝はりし、前九年の時の弓といひ伝し物を見しに、其材は槻にて、外竹のみを合せし也。さらに藤を用ず。又漆をも用ざれども、その合鋒の堅固なる事、奇々妙々の物なり。右、屋代弘堅^{（とよ）}『麻々伎考』に記されし所なり。守本云、表に画する所の弓、ぬりゆみならぬこと、年ごろ不審に思ひしが、右之文を見て明なる事を得たり。鎌倉鶴岡八幡宮に在、頼朝公の御弓といふも、材は槻にて外竹のみ也。有徳院様召よせられて、三輪仁兵衛に命ぜられて、模作らせられし由、其又模す。安永中、伊勢家に習学せし時、保科殿当守相、石川伝左衛門見せたりしを見し事有。其時用る弓よりは、みぢかき様に覺。全体様好上下輯勤殊殊勝のものなりとまをせしかば、能も見られたり。吉田雪計村伝に能合ら様に覺ゆと、伝左衛門が語し事ども、今此考をみるに、いけておもひ出せしむかしか、昔は馬上にてはぬり弓、歩立には白木弓、定法なり。如今時度は、白木のゆみ、体うれぬといふ不自在成るにてはなかりし、今

も紀州の弓人は度有無産別用弓を打と鎚成るなり。古伝のなせし勝他多る名産なり。

〈上巻・一段〉

此弓の限りは、中の巻、鬼武こはうちの次に書べきを、あやまりて爰に記したり。此表の弓は、藤を巻たると覚ゆ。されどもぬり弓とは不見。丸木弓にも藤を巻たる。弓数有よし弘堅マヤの記置れぬれば、白木に藤を巻て、此時代には戦の道に用られしなるべし。白木に藤を巻く事、なかば便利にてよろしき事なり。白木にては露霜の凌ならぬにより、うるしぬり、又藤をも巻事には成たることでぞ考らるゝ也。

〈上巻・二段〉

表に図する手負たる兵、臍当のこうに千鳥掛にいろどりたるは、脛巾のうらのつかり也。古昔すね当る他はなし。其外の臍あてる地をいふは、はごき之すねあてを綴付たる也。当る問の為、後世め此せしなら毎図に千鳥掛なし。原図には有しをばふれたる也。

〈上巻・三段〉

表に図する所は上土門なり。

〈上巻・三段〉

表に図する所の力葦へ鐙の掛様、今の法とは表裏也。刺鉄サスガ、外へ出たり。力葦延縮する事、不自在なれば、左右を取違て掛如。今初しと忽はる鐙の絵様ならで、心を付て見るべし。

〈中巻・一段〉

表に図する馬上の武士、横たへ指たるは、白木の弓と見へたり。今も

奥州に前九年戦の時の弓也とて、古弓の伝はりし。材は槻にて、外竹斗を付て、藤をも巻かず、うるしぬらざる弓の有しを屋代弘堅書れし事を、此所をあやまりて、上の巻に記。其文を見合べし。前九年に用られし事、うたがふべからず。此巻の弓ぬり、弓ならぬ事、年ごろ不審に思ひしに、彼考によりて出て、明説を得て、よろこばしく思ふのみ。

〈中巻・二段〉

表に図する黒ぶちの馬、切付は虎皮と見へたり。古書に行藤切付といふ名あり。むかばきは必色皮にて作る事、定法也。されば色皮にて作りたる切付をむかばき切付といふならんと思よりぬる。守本。

〈中巻・五段〉

表に図する馬の髪刈法師なり。『平家物語』にも出づ。守本。

〈下巻・一段〉

守本云、この図、弓手にさした□小手をささず、肩上袖の明より白く見ゆる。馬手に小手さ、ぬ所明也。馬手に小手さし□ゆへなり。まため手の手くいの下袴□たる形あり。是弓手の袖を肩脇で□みたる図なり。鎧着の図に考説を記□。

〈下巻・一段〉

表に図する武者の兜のて辺より、黒き宝珠のごとき物、何なる歟。所考なし。一本に、髪マヤの元取りを打曲げて、出せし様に画し本もあり。『平家長門本』に、入善小太郎と高階判官と組マヤて組敷れたる時、叔父別府次郎落会て、長綱が兜のて辺へ指を入、元取つかみて首を搔く事有。『盛衰記』小坪合戦の条にも、和田小太郎がツ、キノ太郎が首を取たる条、

甲の天辺に手を入し事見えたり。古の武士なればとて、人ごとに受、限なき兜を被ぶるべきにもあらず。此図の是珠は田沼殿老臣、深谷一郎右衛門所藏の本にあらざれば、慥なる事なし。深谷氏の本は取鳥候の御本を拝借して、住吉内記と狩野栄川院、兩人の筆力を以模したりと、明和四年の友軒有て見し時、在誰を聞。此卷まな第二の本也。

〈下卷・一段〉

表に図する武者、左右に籠手さしたり。是より前、土居して、左の手を後へ突て、口明たる武者も、左右にこ手さしたり。両籠手さしたる図、卷中に希也。打物斗にて弓を執らざる武士なるべし。扱如此作る籠手を、今、産こてといふ。うぶとは、母の胎中より生れ付たる事をいふ。うぶ髪頼也。如此作る小手は、手の拳動、其身に生れ付たるところく自在なれば、後世、しか名付しもの也。上古はたゞ小手と斗いふ成べし。左右取合着用到手間入る故、後世肩上る軒は小して、早葉とせしなるべし。応仁乱後、天下大に乱、世上衰微して、物ごと簡易になりて、古礼を失い、其後、後施後來して、武具の製、一変したり。弓を専らにして戦ふ時は、此小手にあしはれば、用前よろしからず。試て知るべし。脇楯後ろの才腰鉄ばきは、中画にうつして、画落したる也。うたがふべからず。

〈下卷・二段〉

此表にも、両籠手さしたる図。兩人有り。

〈下卷・二段〉

弓射るに竹籠手斗なる事表の図、明なり。

〈下卷・三段〉

此計手の着たるは、鎧にあらず。筒丸なり。此外にもあり。左右に籠手さす。

〈下卷・三段〉

千任丸が下に着たるは机袴と見。外にもあり。

〈下卷・四段〉

首を取、いたに赤札を付る事、古礼也。

〈下卷・四段〉

小頭より玉はり物は大掛なり。今時の肘腹はこれの変じたる也。家に半ひらきたる図有り。くらべ見るべし。

〈下卷・四段〉

古軍礼説□する時、扇をみな開、喜悅之様也。

〈下卷・五段〉

刀物、柄長批折を指。これを出丁といふ歟。

〈下卷・五段〉

童形上髪、『東鏡』にも出づ。

〈下卷・五段〉

表に図する僕役、太刀の柄を指たるは、頗古風也。現在、將軍家御存具など、御供の歴々脇指、一刀にて打刀は僕に指さするに、此図ごとく柄を指也。国々才之内物御家之御刀指は、柄を指と聞。正しく見たる事はなし。扱御家たゞ在実を伝へられし御家かゞなれば、さも有ぬべし。主が聞、明むべし。さやを指て、所により危き事有べし。

〈下卷・五段〉

弓指侍の役也。

〈下巻・五段〉

表、数機行軍のさま也。軍散して帰参之所、むかばきは旅行の具たる事、『和名鈔』に出づ。今時立つ侍性府を旅行に著作がごとし。

紙幅の都合もあり、すべての書き入れについて分析する余裕はない。

下巻に付けられた注釈が圧倒的に多く、繰り返し読まれていたことがよくわかる。下巻の痛みが激しいことも、ここに由来するものであろう。小谷守本の熱意が現状に反映されているわけである。

さて、この裏書からは、奥書の内容を補足する情報がいくつもある。「奥書・識語4」でもみられた田沼意次の家臣、深谷市郎右衛門の所蔵していた伝本は、祖本である因幡池田家の所蔵本（東博本）であり、住吉具慶・狩野典信といった当代一流の絵師に描かせたものであったことが語られる。守本とこの伝本の出会いから山内本は始まったと言ってよいだろう。また多くの武家が『後三年合戦絵巻』を求めていた様子も垣間見える。上巻・二段の「原図」は伊勢本であろうか。下巻・一段の「一本」が、これらの絵巻とは異なるとすると、守本自身も伝本の校合を行っていたと解される。

この裏書から守本の故実の学問成果がうかがい知ることができる。武家の知識として『後三年合戦絵巻』がいかに重要だったのかがわかるだろう。さらに、上巻・三段「心を付て見るべし」、下巻・一段「古の武士なればとて、人ごとに受、限なき兜を被ぶるべきにもあらず」、「試て

知るべし」と、武士としての在り方、理想像が語られる。山内本は、単なる模写絵巻ということだけでなく、読み、研究され、理想像が求められる、そういう絵巻だったのである。

五、おわりに

今回は本文、絵画の分析までは至らなかった。今後は小谷守本も行っていただろう綿密な模写本の校合、絵巻を読み解いていくことが必要となるはずである。『後三年合戦絵巻』の伝播や展開を知る上で、山内本は貴重な伝本であり、さらなる分析が必要となる。本稿がその一助になれば幸いである。

〔注〕

- (1) 楊曉捷「絵巻の模写から何を読み取れるのか―『後三年合戦絵詞』模写群を手掛かりに」(『立教大学日本文学』山号、二〇一四年一月)
- (2) 三田葆光『白石先生年譜』(白石社、一八八二)によれば、享保八年(一七二三)に生まれ、安永四年(一七七五)に死去している。
- (3) 『日本人名大辞典』によれば、小谷守本(おたに・もりもと、一七五一―一八二二)、江戸時代中期―後期の武士、有職家。宝暦元年生まれ。土佐高知藩士。江戸にて伊勢貞丈にまなぶ。帰藩して藩士に故実をおしえる。また流鏑馬や犬追物をおこない、雑

喉場に騎射場をつくった。文政四年六月一日死去。七十一歳。通

称は左近助。

- (4) 寛政の三奇人の一人とされる高山彦九郎の『高山彦九郎日記』寛政元年（一七八九）十月十六日条に、『論語』に注を施した人物とみえる（長田偶得『偉人日記』成功雑誌社、一九一一年）。

- (5) 村岡典嗣「市井の哲人司馬江漢―思想家としての司馬江漢」（前田勉編『新編日本思想史研究 村岡典嗣論文選』東洋文庫、二〇〇四年）、池内了『司馬江漢 「江戸のダ・ヴィンチ」の型破り人生』集英社新書、二〇一八年。

- (6) 注（5）、池内了著書。

- (7) 芳賀徹・太田理恵子『江漢西遊日記』（東洋文庫、一九八六年）

- (8) 山内本の外題と本文の手は同筆であるようにも見える。同筆の場合、伊勢貞丈によるものとなるが、ここで判断することは避けたい。

- (9) 上巻・下巻にはある。また、「奥書・識語2」も同様にある。

- (10) 内容は『後三年合戦絵巻』の成立に関わるもの。書き入れは、伊勢貞丈によるものだとする。

追記○吉記（権中納言／経房卿記）承安四年三月十七日甲辰ノ條云拾遺來臨為_レ見_二申_一サ_二カ_一 絵_一所招引_一スル也件ノ絵、義家ノ朝臣為_二陸奥ノ守之時与彼ノ国ノ住人武衡家衡等合戦絵也件事雖_二伝_一ハ言_一ト委_ク不_レ記_一サ_二又_一不_レ画_一カ、静ノ賢法印先年奉_二院宣_一ヲ始_一テ令_一画_一カ、也彼ノ法印借_二御倉_一ヲ出_シ御倉_一ヨリ送_レラ_二為_レ消_一セン_二徒然_一ヲ欺_一此文貞丈写之

- (11) 登録名「前九年絵巻物」、外題には「前九年／後三年絵巻物」とある（国

立国会図書館デジタルコレクション）。

- (12) 豊後、岡藩の藩校由学館であろうか。

- (13) 東博本は不明瞭だが、『日本絵巻大成』解説には、「雪の州浜に白鷺が群れる」とする。

「付記」本稿執筆に際しての高知県立高知城歴史博物館『後三年合戦絵巻』の閲覧は、国文学研究資料館の文献調査に伴い行われたものであり、当該調査の成果報告でもある。最後になりましたが、資料の閲覧を許可していただきました高知県立高知城歴史博物館、また資料の出納など大変にお世話いただきました学芸員の田井東浩平氏に感謝申し上げます。